

スーダンの有用植物＜その 6＞

メスキート

今回の有用植物はメスキート（*Prosopis juliflora*）である。メスキートについては、AAINews 第 73 号の「乾燥地植物あれこれ」のミニシリーズでとりあげたことがあり、その長短所の両側面から論じたが、今日のスーダンにおいて、メスキートを「有用植物」と考える人はほとんどいない。南米原産のメスキートは、本来は砂丘固定用の外来植物として約半世紀前の 70 年代にスーダンに導入された。旺盛な繁殖力と生長・生育の速さから、砂漠化対処の切り札として期待された。そういう意味で、メスキートは導入時点では有用植物として位置づけられたといえるが、その後、スーダン国内での評判を急速に落としていくことになる。繁殖力が強いことが仇となり、人為コントロールの域を超え、畑・道路近傍等への侵入・拡大を防ぐことが次第に困難となった。明確に強害雑草として「除去」の対象となり、90年代半ばになると国営灌漑スキームにおいては政府による大がかりな雑草防除キャンペーンが実施されもした。また防除技術確立に向けての努力もなされたが、本格的にメスキートを除去しようとなると、十分な発芽・再生防止策を講じる必要があり、重機による根おこし（uprooting）や薬剤散布が求められ、依然としてコスト面での難点がある。

さて、一般的には嫌われものとされるメスキートであるが、筆者は 2011 年以降、スーダンにおいて、その有用面に着目し、農家・農村女性による高度利用化を追及してきたので、最近の活動動向を簡単に紹介したい。まず、すでに農家レベルで広く普及してきている利用法としては、炭生産がある。伝統的な炭焼きのスタイルとしては、枝打ちしたメスキート木を積みあげ土をかぶせて燻すやりかたである。湾岸アラブの近隣諸国ではバーベキュー用炭の需要があり、輸



メスキート材の炭焼き風景

出される例もある。もっと直接的な活用として、薪がある。薪は、ガス化・電化の進展もあり、調理用燃料として減少の一途をたどってきたが、昨今のスーダン経済情勢の悪化から利用が見直されている。さらに、メスキートはマメ科植物であり、たんばく質含有量の高さから、堆肥、ないし家畜飼料としての開発の方向も大きな可能性があり、試験的に利用の促進を図っている。その他、建材（木材）やマメ鞘粉末による食品化についてもこれまでの活動でとりいれたことがある。このようにメスキートは農業生産の場面での一段の利用促進が考えられる。

ただ、留意点としては、家畜採食や水流による種子拡散を防止することであり、十分な粉碎工程を加えることが重要である。



家畜の採食による種子拡散

では、メスキート導入の原点である砂漠化対処に立ちもどるとどうか。残念ながら、メスキートを有用木としてコントロールする有効な術はなく、現在スーダンでは計画的な植林は行われていない。しかしながら、かつて筆者がカッサラ州のアトバラ川東岸で出会った、整然と直立するメスキート林にヒントがあるとおもわれる。それはドイツの NGO 活動で育林されたものであったが、技術のポイントとしては、「枝打ち」と「間引き」の併用にあると推察された。作業適期や土壌水分が関与している可能性があるが、ここに管理の要諦があると考えられる。



NGO による植林活動

今回は、あまり語られることのない「有用植物」メスキートの利用面について書いてみた。今後、さらに農家レベルでの低コスト、かつ高度な利用化をめざし、活動のなかで実践を重ねていきたいと考えている。